

○人物登場：高田 真氏 (アーキウォーク広島代表)

11月16日(土)にお会いする。アーキウォーク広島のイベントのさなかである。見学会から見学会への移動の合間を縫って1時間のインタビュー。高田氏はカメラと三脚を持参して現れる。建築写真を撮るのが趣味という。

生まれ育ちは

広島に生まれ、育ち、平和記念公園は自分の庭のように慣れ親しんでいた。基町の護岸デザインに興味を持ったのをきっかけに東京の大学に進学し都市計画を専攻。そのまま東京に勤務する。実家が広島のため、しばしば帰広し、好きな建築の写真を撮り続けた。その溜まった大量の写真を世に出せないかとの思いがアーキウォーク広島の誕生につながる。

アーキウォーク広島とは

アーキウォーク広島は、広島市内を中心に優れた建物を広く市民に紹介し、内外の建築ファンを増やすことにより地域を活性化していこうという市民組織である。建築好きな人が集まり、主な活動として建築ガイドブックの発行と建築公開イベントを開催している。高田氏はアーキウォーク広島の代表だが、建築の専門ではなく、都市計画の仕事に従事している。しかし、建築を見る目はプロ並みだ。特に丹下健三氏については造詣が深い。将来、広島に戻ってくる気持ち確かめたが、「今は東京で修行しているが、将来的には帰りたい気持ちはある。」との回答であった。

広島のまちは

東京のまちは良しにつけ悪しにつけ江戸を引きずっている。広島は一度原爆で焦土と化したのが、先人たちの苦労によって、その後の都市基盤が整備されている。例えば河岸緑地は国内の先端を行っており、東京でやろうとしてもなかなか進まない。

逆に広島は歴史の継承が課題である。ともすれば昔のまちや建物の復元という話が出るが、復元で成功した例はなく、おすすめできない。数少ない成功例は伊勢の「おかげ横丁」だが、それは復元ではなく本物の古民家の移築だからこそうまくいっている。また、東京の「三菱一号館」はレンガを積み直し、装飾も職人が丁寧に再現しており、立派な復元といえるが、莫大なお金がかかっている。広島の場合は、残り少ない被爆建物の保存活用や、昔の木造建物が残っていれば移設してでも保存するなどであろう。いずれにしても本物でなければただのレプリカであり、市民に愛され生きながらえるのは難しい。

また、被爆建物は注目されても戦後の建物には関心が薄いのも課題。例えば被爆校舎が一部保存されている本川小学校には1954年建築の校舎が残っており、モダンの佳作であるが全く知られていない。このまま戦後のモダンな建築が失われていくのは惜しい。

平和記念公園は祈りの場として完結し、いろいろと制約が多い。中央公園一帯はイベント等による情報発信など、平和記念公園にはできないことをやれる場にして、互いに機能を補い相乗効果を出すことで、他のどの都市とも違う広島らしいまちづくりが実現するのでは。

広島もまもなく人口減少期に入り、中心部の活性化も将来的には大きな課題になる。高松の丸亀町商店街のような再生成功例はあるものの、どの都市も大変苦勞している。元気のあるうちに先手を打って取り組んでいくことが大切だと思う。

アーキウォーク広島の目標

まず、地元で「建築まち歩き」が散歩のジャンルとして確立することと、外部から建築目当てに広島を訪れる人が増えることを目標にしている。長期的には、多くの市民が建築にこだわりを持ち、オーナーたちも自分の建物に誇りや愛着を持つようになること。結果として、広島の都市が美しく魅力的になっていくことを目指している。

▼アーキウォーク広島のホームページ：<http://www.oa-hiroshima.org/>



略歴：1978年広島生まれ。都市プランナー。2009年よりアーキウォーク広島代表

コメント 建築を愛し、広島を愛する人である。いつの日か広島に戻り、広島のまちづくりに活躍されることを期待したい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第10号(平成26年3月15日)

○人物登場：平尾順平氏（NPOひろしまジン大学学長）

寺町の一角に佇むビルの1階にひろしまジン大学の事務所がある。時間より少し早目に着くと、平尾氏はお茶の準備をしていたようだ。中断して取材に応じる。学長とはいえ、身の回りのことは自分でやれる人だ。

生まれ育ちは

生粋の広島人である。小学生の頃から器械体操を始め、体操の強いソ連や東欧の国に興味を持ち、大学も国際学部を専攻する。1年の休学を取り、アルバイトで貯めたお金でタイから西へ、ポーランドのアウシュビッツまで放浪の旅をする。

大学卒業後は日本国際協力センターに就職し、海外出張に明け暮れる。その中で、現地の人々の今の広島に対する認識の低さと自分の広島を説明する力の無さを痛感し、30歳で広島に戻って学ぶことを決意する。

ひろしまジン大学立ち上げの動機

最初、公民館の館長になって地域に根差した活動がしたいと思ったが、すぐには難しい。当時、他都市で芽生えていた「街をキャンパスに見立てた市民型大学」の動きに共感。広島県全体が学びの場になって、そこに住む人と学び合い、考え方をシェアできる場として「ひろしまジン大学」を立ち上げた。ひろしまの顔として人（ジン）を前面に押し出すために名前にジンを挿入する。

ひろしまジン大学の運営

組織は逆三角形で一番下に学長と事務局の2人、その上に授業を作る企画コーディネーター、その上にイベント等を手伝えるサポート・スタッフ、その上に登録学生、その上は潜在的学生に開かれている。スタート時は6人で立ち上げたが、現在は登録学生まで含めて約2000人。学生の中から手伝いたい人がサポート・スタッフ（約120人）へ、更に一緒に授業を作りたい人が企画コーディネーター（20人強）へ降りていく。

みんなが作る側に参画して入り混じっているのがよいと思っている。スタッフは基本的にボランティア、コーディネーターの旅費のみは負担する。資金調達はスポンサーがいるわけではなく、行政や大学や企業のニーズに企画を提案し、業務として受注している。例えば、若者のマーケット調査を実施し、広島に関わる商品開発を大学の授業の一環として行う。企業が独自に行うよりジン大学が関わることで公共性が高まり、話題性が増して、マスコミ等が取り上げやすくなる。

これからの目標

住民参画ではなく行政参画が本来の姿ではないか。住民がやっていることに行政がお手伝いする。自分たちのことは自分たちが主体的に関わっていく当たり前の社会を目指したい。今すぐ市民意識を変えるのは難しいので、第一歩としてジン大学は自分たちの住んでいるまちを知るところから始めている。

行政を頼りにしている組織は弱い。行政からの支援は輸血であり、食べたものが血液として循環している正常な姿ではない。国の借金が膨らむなか、どれだけ行政に頼るのか。できるだけビジネス化して人も物も金も回っていく社会を描きたい。そのためにはジン大学だけでは無理なので、志の近い組織や人とつながっていく。

仲間になりたい人が同心円状に広がっていく、思いの連鎖・伝播を大事にしていく。とにかく組織は周りに淵（バリア）ができて外からは閉じて見えるので、他の組織や人と一緒にやるこ



略歴：1976年広島生まれ、広島市立大学卒、日本国際協力センター、広島平和文化センター勤務を経て、2010年ひろしまジン大学立ち上げ

とを心がけている。ジン大学を開かれたプラットホームにすることが課題の一つである。

学びながらスパイラル状に上昇することで、まちに変化が起こる。今、集う場ができたので、次はチームを組んで何かを具体化するプロジェクトに取り組んでいきたい。

▼ひろしまジン大学のホームページ：<http://hirojin.univnet.jp/>

コメント しっかりと未来を見据え、自分の志を大事に育てている。謙虚で礼儀正しい好青年だ。すくすく伸びて大輪の花を咲かせてほしい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第11号(平成26年5月15日)

○人物登場：若狭利康氏（NPOセトラひろしま理事長）

セトラひろしま事務局に隣接する会議室で取材する。途中、テーブルの片隅でやかんが沸騰し始め、若狭さん自ら紅茶を入れながらインタビューに受け答える。その柔軟性とサービス精神に感心した。

☆生まれ育ちは

祖父が赤穂から広島に来て、大正屋呉服店（現平和公園レストハウス）の支配人をしていた。戦後、金座街に呉服店を構え、若狭さんは3代目。5歳まで店に住んでいたが、小町に自宅ができ、そこで子供時代を過ごす。店の前の路上でよく落書きしたことを思い出すという。

大学時代に広島を離れただけで、卒業後すぐにはわかさ屋呉服店に入社する。生粋の広島人である。

☆中振連の活動とセトラひろしま設立の経緯

1984年に金座街商店街振興組合の青年部会に入り、勉強会を通じて商店街活動の意識が変わる。特に1987年、熊本の上通商店街を視察した時、各商店街の垣根を越えて行政を巻き込んだイベントを行っており、商店街が街を動かしていることに衝撃を受ける。

早速、横の連携を図るため、中央部商店街間で「青年部懇親会」を設け、駐車場不足を解消するための対策等を検討する。広島市中央部駐車場システム事業を開始し、1992年にその運営母体として広島市中央部商店街振興組合連合会（略称：**中振連**）が発足する。

一方で、フラワーフェスティバルに対抗して実施されていた「GOGOひろしま春まつり」（主催：広島テレビ他）が1997年に中振連に引き継がれ、「ひろしま春まつり」としてリニューアルスタート。そこに石丸良道氏（セトラひろしまの中心人物）等のまちづくりのボランティア・グループが参画する。

1999年秋に世間を騒がせた暴走族事件が起こり、そのあおりで「ひろしま春まつり」も中止となる。ボランティア・グループの行き場がなくなり、その受け皿としてまちづくり組織「**セトラひろしま**」を発足させ、2003年にNPO法人の認定を受ける。

*セトラとは、広島市中央部地域を意味するセンターエリアの略語

☆セトラひろしまの運営

ミッション遂行型のNPOで、働いて稼ぐのが基本。イベント等は中振連から請け負って実施している。アリスガーデンもアリスカフェの売り上げを中振連に還元して、セトラの活動「アリスガーデンパフォーマンスひろば事業（通称：**AH!**）」に回している。昨年行った「**イノコ大福フェスタ**」も中振連が国から補助金をもらい、セトラが実施。周りからセトラは裕福な組織と思われているが、内実は自転車操業という。

商店街の活動は土地に縛られているので、基本的に外に出れないが、セトラはテーマ型なので活動範囲が自由である。出前アートも可能だし、「明日の神話」の誘致や「新藤兼人の百年の軌跡」開催の事務局もやった。

☆これからの目標



略歴：1956年広島生まれ、1978年関西学院卒、わかさ屋呉服店入社、現在、セトラひろしま代表、広島市中央部商店街振興組合連合会専務

まちづくり会社までいなくても、中振連、セトラの枠を超えた活動を行いたい。地域コミュニティとの関わりを深めていくためには商店街に住む人を増やしていく必要がある。一つの理想形として高松丸亀町商店街がある。低層階を店舗、その上を住居や医療・介護施設にして、そこで一生を過ごせる。これぞコンパクト・シティのモデルであろう。

地権者が多く、地価が高く、利害関係が複雑な本通では高松のようにはいかないが、本通ヒルズのような合築の機運が広がっていけば可能ではないか。

▼セトラひろしまのホームページ：<http://www.cetra.jp/npou/gaiyou.htm>

コメント まちづくりに対する熱い思いが伝わってきた。広島のを元気にするためには中央部が元気でなければというビジョンを掲げて中振連とセトラが一体となって先導している。ますますの活躍を期待したい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第12号(平成26年7月15日)

○人物登場：隆杉純子氏（ポップラ・ペアレンツ・クラブ代表幹事）

はじめての女性登場。ホテル・フレックス1階のカフェテラスで、京橋川からの爽やかな風が心地よい。おもむろにバッグからパソコンを取り出し、この中に言いたいことが詰まっているという話からインタビューがスタートした。

☆プロローグ

生まれも育ちも広島。30代から40代前半まで東京の駒沢公園近くに住み、みんなが公園で楽しんでいる光景を見ていた。広島に帰って初めて広島の良さに気付く。特に川沿いの開かれた空間は素晴らしい。パリの川岸には分かりやすい「通りの名前」が付いていることをフランス人から教わったことが印象深く残っていた。

そこで広島の川沿いの道に名前を付けることを思いつき、職場の人に話すと、広島市が推進している「水の都ひろしま」の市民活動助成事業に応募するよう勧められる。よく分からぬままに申請し助成を得て、3か所の川沿いの道の愛称を市民に公募する。その結果、基町環境護岸の一部に「基町ポップラ通り」という愛称をいただく。

☆ポップラ・ペアレンツ・クラブ設立の経緯

ここになぜ1本のポプラの木が立っているのか、周辺のことを調べていた時、2004年9月に台風でポプラが倒れ、官と民が協力して植え直す。これを機にポプラの再生を見守っていくために集まった市民と企業のボランティア団体として、2006年7月にポップラ・ペアレンツ・クラブ（略称：PPC）が発足した。

基町環境護岸の管理者である国土交通省太田川河川事務所と管理協定を結び、毎月第4土曜に基町ポップラ通りの清掃と草刈りをする代わりに、野外上映会などイベントが可能となる。現在、管理は広島市緑政課に移行した。

☆PPCの運営

清掃と草刈りの道具やガソリン代など必要経費は管理者の市が負担し、PPCメンバーはボランティアで汗を流している。除草されたきれいな緑地を見渡すとき、達成感で一杯だ。

PPCと広島市映像文化ライブラリー共催の野外上映会は、この夏、7回目となる。スクリーンの設営、映画の上映に関する費用は映像文化ライブラリーが担当し、それ以外の会場設営や広報、参加募集、実際の現場作業をPPCが行っている。企業から協賛を募り、映画鑑賞者には任意で参加費500円をお願いして、なんとかやり繰りしている。

☆PPCの活動のエピソード

基町環境護岸の設計者・中村良夫東工大名誉教授から「ポプラを残すためにデザインした」



野外上映会のチラシを手に



撮影(2004年7月)前田文章

と伺い、感動した。また、漫画『夕風の街 桜の国』の原作者、この史代さんと出会ったことがP P Cの活動に弾みがついた。さらに、映画撮影のロケ地にこの場所が使われたことが野外上映会を始めるきっかけとなる。2回目にはゲストとして佐々部監督、主演女優の麻生久美子さん、この史代さんを迎え、トークショーを実施。広島生まれのこのさんの協力で、初代のベビーポップラ（ひこばえ）が東京の平和の森公園に植樹された。別の里親に育てられた2世のひこばえが今年2月に里帰りし、現在の3代目として風景をつくる大役に挑戦している。

☆これからの目標

最近、基町ポップラ通りに魅かれてイベントをする若い人が増えた。結婚式、アースデイひろしま、green ground market (ggm)などの会場となり、P P Cはそのサポートに徹する。楽しく利用されることによりその場所に愛着が芽生え、使う人のマナーがよくなっていく。これからも河岸緑地の素晴らしさを次の世代に伝えていきたい。

▼ポップラ・ペアレンツ・クラブホームページ：<http://poplaparentsclub.web.fc2.com/>

▼野外上映会「おまえうまそうだな」：8月2日（土）、17:30 開場、子供連れて是非ご来場を！

コメント 会社員の一女性がこれだけアクティブに活動できる秘訣は、人柄であろう。人とのつながりに恵まれたという。まだまだポップラ物語は続きそうだ。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第13号(平成26年9月15日)

○人物登場：井上英之氏（オフィス慧 専務）

昨年8月に37年ぶりに広島に戻り、今年先輩と二人で会社を設立。これまで蓄積したノウハウを故郷に還元したいという思いを心に秘め、今温めているアイデアを熱く語ってもらった。

☆これまでの足跡

広島に生まれ高校まで育ち、大学から離れる。社会人として大半を東京で過ごし、主にマーケティングの仕事に従事する。

鈴木東京都知事時代に臨海副都心開発の計画が持ち上がり、博報堂の有志で勝手に新しいまちづくりを企画・検討し、押しかけプレゼンの結果、江戸東京の400年の歴史を学ぶためのカルチャー教室「江戸東京自由大学」企画が認められ、都が予算をつけてくれた。

その後、都が博覧会を企画・運営するため設立した（財）東京フロンティア協会に出向、5年半携わることになる。

博報堂退社後、広告からマーケティング全般にフィールドを広げて仕事をしてきた。東京にはスキルも人材も豊富だが、コンテンツはローカルにあると気づき、2年前に広島に帰ることを決意した。

☆ 広島のみちと人の印象

広島に帰ってからの第一印象は、川と緑が美しく、町がきれいなことだ。町がコンパクトで、広島駅からバスセンターまでよく歩くが、欲しいと思うところに店がない。東京の街中は歩くのが基本だが、広島は車を利用する人が多いので、店づくりの商圈が東京と異なる。よく広島駅地区、八丁堀、紙屋町が個別の商圈として扱われているが、どう見ても一つである。各エリアからの回遊性を高めるためにも、歩いて不自由のない街にした方がよい。

広島の知名度は世界的に高いが、20数万人の犠牲の上に成り立ったものである。亡くなられた人のことを考えながら、その知名度を活かして正しく商売をし、まちを元気にさせることは我々の責務である。原爆を食いものにしているという批判は当たらないと思う。

広島のお土産には知的な付加価値の付いたものが少ない。原爆ドームを見ても、考える場所や語り合える場所がない。メモリアルなもの、メッセージを託せるものを用意すべきである。広島人の気質として、商売は悪のような意識があるのではないか。



略歴：1958年広島生まれ、1981年京大卒
博報堂入社、
1992年（財）東京フロンティア協会出向、1997年博報堂退社、2014年オフィス慧設立

広島の人には誰かが右を向くと、自分は左を向きたがる。それぞれが努力しているけれど、ベクトルを合わせて協力するのが苦手なようだ。

☆ 広島のまちへの提言

「広島セントラルエコパーク構想」と呼ぶ。パークアンドライドを徹底して、街中は公共交通と徒歩と自転車で移動する。都心回帰で高齢者が都心マンションに移り住んでいるが、マンションを核として楽しく出歩けるまちは、適当な間隔で休憩所やカフェ・レストランや公衆トイレ等が配置されている。

昨年の広島への外国人観光客は53万人。やがて100万人の時代がやってくるので、様々な角度から検証し、対策を打たなければいけない。特に、円滑で快適な観光動線を誘導するサインとピクト化（絵文字）、世界遺産ビジターセンターの整備、交流学习の場となるゲストハウスの整備が急がれる。

☆これからやりたいこと

170本の被爆樹を一元管理するNPOとゲストハウスを来春立ち上げる予定。不動産会社の協力によりビルをリノベーションしてゲストハウスを作り、その収益をNPOに還元して運営していく。被爆樹を切り口として交流機能をもつゲストハウスは、広島ならではの情報を発信できる。それから、広島ブランドを作って外国に売り込むことと被爆以前の広島歴史・伝統のベクトルを大事にしていきたい。

コメント アイデアが溢れんばかりに出てきた。企画マンたる所以であろう。一つずつ実を結ばせて、広島におけるトップランナーとなり、後続を育てて欲しい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）